

天国と地獄の狭間で

AIPPIベルリン・フォーラムに参加して

弁理士 徳永 博

ベルリンという町

ベルリンは不思議な町である。中世、野生の熊が徘徊する森と川の一隅に人が住み着き、町となった。ベルリンとは熊の棲家を意味する。近世ブランデンブルグ公国の首都であった頃は、フリードリヒ王の居城と狩猟場が、イザール川の兩岸に広がる、こじんまりした城郭都市だった。19世紀初頭、ナポレオンのロシア遠征軍によって踏み荒らされ荒廃した中で、ベルリン大学長であった哲学者フィヒテが「ドイツ国民に告ぐ」という大演説をして学生や市民を鼓舞した時は、ドイツはまだ幾つかの領邦に分かれて、国家の形を成していなかった。それが19世紀中葉、宰相ビスマルクがプロシャ王ウイルヘルムを担いで、ナポレオン3世のフランスに勝利し、ドイツ統一を成し遂げた時、ベルリンは晴れて統一ドイツの首都となったのである。

王宮前の大通りウンターデンリンデンの西端に、凱旋將軍を迎えるブランデンブルグ門と、そこから更に西へ戦勝日に当たる「6月17日」通りが、昔の狩猟場テアガルテンの真中を貫通して造成され、その南にはポツダム広場や、新しい繁華街クルフェステンダム、通称クーダムが開かれた。新生プロシャの隆盛を象徴するドームやシンケル設計の柱列で知られる歴史博物館、ベルガモン美術館を中心とした博物館島、フリードリヒ・ウイルヘルム大学や国会議事堂がブランデンブルグ門の周辺に、金色の天使像を載せた戦勝記念碑が「6月17日」通りの中央（写真1）に、そして今回AIPPIベルリン・フォーラムのパンフ

レットの表紙を飾ったカイザー・ウイルヘルム記念教会（図1）が、クーダムの中程に建立された。



写真1

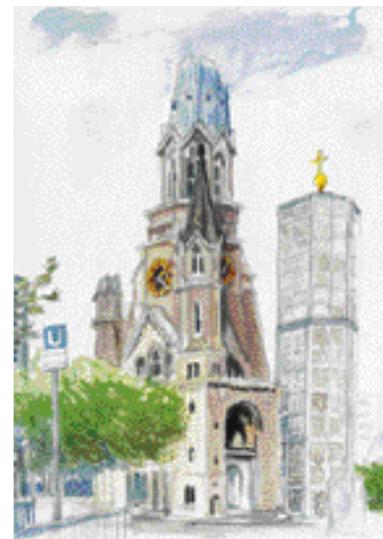


図1

明治時代、陸軍軍医だった森鷗外はベルリンに留学し、今はフンボルト大学と称するフリードリッヒ・ウイルヘルム大学に通った。明治大正期の学者が競ってドイツを目指したように、わが特許庁の先輩達も競ってドイツの法学に学び、コーラーの特許法概説に傾倒した。「何でもコーラー」の成果が大正11年法となっている。後にユダヤ人迫害でアメリカに亡命した物理学者アインシュタインも、一時期この大学付属のフリードリッヒ・ウイルヘルム研究所で教鞭を取り、相対性理論を生み出した。ナチス・ドイツ時代、大学関係者が書物や楽譜を焼くことで、実はアーリア民族が秦の始皇帝と同じようなことをしていたことを暴露してしまったフンボルト大学の一角には、戦後アインシュタインのレリーフが掲げられ、実は彼がこの大学の誇りであったことを、申し訳なさそうに物語っている（写真2）。



写真2

ヒトラーの亡霊

第一次大戦敗戦後の混乱と未曾有のインフレから辛くも立ち直ったドイツ人は、強力な指導者ヒスマルクの再来を求めた。そこに登場したのがアドルフ・ヒトラーである。一旦ミュンヘン蜂起に失敗し囚人となっていたヒトラーは、獄中の著書「わが闘

争」を引提げて再びベルリン市民の前に姿を表わした時、彼らは「ハイル！ハイル！」と熱狂して、この新指導者を迎えた。第三帝国の始まりである。短期間に失業とインフレを克服してドイツ国民の人心を掴んだヒトラーが、この牧歌的なベルリンを、ロンドンやパリに勝る帝国首都として整備しようとした。恐ろしく天井の高いスポーツ宮殿や巨大な鉄傘の下に旅客機が次々と発着するペンテルホーフ空港、2本の巨大柱のあるオリンピック・スタジアムが、ドイツ全土に張り巡らされたアウトバーンと共に、戦争末期の大空襲から逃れたナチス・ドイツの遺構として残されている。しかし彼が1級建築士でもあった軍需相シュペーアに命じて立案させた新帝国議会のドームを中心とする大ベルリン計画は、敗戦によって幻と消えてしまった。この壮大な都市計画案は、60年経った今でも、ベルリン市民が愛憎をこめて回顧する。そんなポスターを、戦後東ベルリン側にあったウンターデンリンデン通りの端で見かけた（写真3）。



写真3

一方、西ベルリン側の中心的存在、プロシヤ帝国の威光を象徴するカイザー・ウイヘルム記念教会は、1943年11月23日夜の大空襲で、正面入り口と中央の大尖塔を除いて壊滅した。戦後それを元通り復興すべし、いや更地にして近代的な会堂を建てるべし、という議論が交わされたが、正面入り口と大尖塔はそのままにして、前庭と背後に色ガラス入りブロックを六角柱状に積み上げ、天蓋に金色の玉に十字架を乗せた、超近代的な教会堂が出来あがった。焼け爛れた大尖塔には金環で縁取られた大時計がくすんだレンガの表面から浮き上がって、戦後の時を刻んでいる(図1)。その下の広場では、戦争を知らない若者達が集まって、パフォーマンスに興じていた。この教会に限らず、繁華街クーダムやポツダム広場は、さながら世界中の前衛建築家の実験場のごとく、フジヤマを思わせる天蓋や鉄とガラスの城が林立して、人々を浮き浮きさせる。その狂乱の波は、悪名高い「ベルリンの壁」が毀された後の東ベルリンにも押し寄せており、2年前訪れた時には雑草に包まれた野原だった総統官邸跡 - その中にはヒトラーが最後を遂げた防空壕跡もあった が、今夏には長方形の巨大な石を数百基、敷地一杯に整然と並べたオブジェ広場になっていた。人はこれをホロコースト祈念公園という。まるで防空壕の中のヒトラーの亡霊が出現しないように、上から押さえつけているようにも見える(写真4)。同じ枢軸国でもローマのムッソリーニが執務した首相官邸は、元のまま



写真4

ベルルスコーニ現首相が使用しているし、わが永田町の旧首相官邸は、40メートルずらしただけで保存建築となっているのに、ドイツ人には、ヒトラーとナチス時代のことなど、思い出したくないのかも知れない。

ベルリンのアメリカ人

ベルリンにはその代わりに、他の都市では見られない戦後冷戦期の遺物がある。域内からの逃亡者を阻止すべく東ドイツ政府が市を真中から東西に分断した「ベルリンの壁」はあまりにも有名だが、それが1988年崩壊した後も、燦然と残っている記念碑が、総統官邸に近いアンハルター駅跡に出来た科学技術博物館の塔屋から飛び出している米軍のC47輸送機(写真5)と、テンペルホーフ空港前庭に屹立している「ベルリン空輸記念碑」(写真6)である。ドイツ降伏から3年経った1948年6月、ベルリン市の共同管理に業を煮やしたソ連がベルリン市への陸上交通を全て封鎖した。その時アメリカを始め連合国は、飢えに瀕したベルリン市民の為に、西側の基地から食糧や石炭からナブキンに至るまで、ありとあらゆる生活必需品を航空貨物で市内のペンテルホーフ空港に運び込み、それが1年に及んだのである。冷戦の最中に冷静な判断と鉄の意志でこの空輸作戦を成し遂げたアメリカ軍の司令官と若いパイロット達 その中には墜落事故で生命を落とす者もいた に



写真5



写真6

ベルリン市民は歓喜した。その感謝の念は空港内の壁画にも残っている。ベルリンでアメリカ人がモテるのは、この未曾有の「ベルリン空輸」の所為であって、後年壁の前で「私もベルリン市民だ」と胸を張ってみせたアメリカ大統領J.F.ケネディの人気の為ばかりではない。日本人がとうにマッカーサーとGHQの業績を忘れて、押し付けではない自主的な憲法改正だと騒いでいるのに、ベルリン市民は義理堅く記念碑を守っている。それは東西冷戦が1980年代まで続いたからばかりではないようだ。

それが21世紀になって、何という変わり様か、東西ベルリンを分けるブランデンブルグ門からウンターデンリンデン通りにあるロシア、フランス、イギリス大使館が開放的であるのに、その北の路地にあるアメリカ大使館だけは、何を怖れるのか、「ベルリンの壁」よりも数倍も分厚いブロックで囲み、その上写真撮影禁止であった（写真7）。昨今の国際テロ組織はロケット砲を持ち、旅客機を乗っ取って高層ビルを崩壊させる御時勢なのに、ベルリン駐在ア



写真7

メリカ大使は、インデアンに攻撃されるアラモ砦の夢でも見ているのだろうか。イラク戦争以来アメリカ人の評判は、ベルリンでは下がる一方である。

AIPPIベルリン・フォーラム

国際知的財産保護協会（AIPPI）は、従来は3年に1度の総会が主たる行事であったが、他の知的財産権団体例えばFICPIが、毎年数日に及ぶ学習フォーラムを開催して、全世界から会員のみならず知財研究者、弁護士、弁理士志望の学生等を集めていることに刺激されて、年に1度のフォーラムを開催するようになり、今回のベルリン・フォーラムで第3回となる。会場はベルリンでも有数のホテル・インターコンチネンタルが用いられ、米国、ヨーロッパ、中南米を中心に約200名の参加者があった。アジアでは日本はじめ中国、韓国からの参加者があったが、少数グループに止まった。その大半はフォーラムに続く執行委員会EXCO出席の為の参加者で、筆者のようにフォーラムだけの出席者は更に少数だった。

23 - 25日のフォーラムは、セッション「スポーツ・イベントにおける知的財産の保護」に始まりセッションの「ヨーロッパ特許庁は“つまらぬ”特許を許していないか」というように実務に沿ったもので、前者は2006年サッカー・ワールドカップ前後で有名選手やチームにあやかっただけの商標出願や侵害事件が急増することが予想され、特許商標庁や訴訟弁護士が活発な議論を展開した。またセッションで



写真8

は、ミュンヘンの弁理士バルデーレ氏がモデレータを務め、EPO特許審査基準担当部長ビルポット氏、他ヨーロッパ弁理士2人、わが国から中村合同の熊倉禎男弁護士が、日本国特許庁の審査基準を説明したが、本題にはあまり絡まなかった。本会議は何処かの大使館と違い、肖像権保護の意味で写真撮影禁止だったが、ハーモナイゼーション会議以来の盟友バルデーレ氏には断って撮らせて貰った。派手にフラッシュを焚いて主催者に怒鳴られないようにと、スローシャッターで勝負したが、手ぶれしてしまった(写真8)やはり禁を破るのは怖い。

この「“つまらぬ”特許」というタイトルは、EPO関係者にとっては看過できなかったようで、最終日の閉会式で挨拶に立ったEPO長官ボンビドー氏は、諧謔を含ませながら、EPOは“つまらぬ”特許を許した覚えは無い。たまたま広い権利で皆さんを騒がせただけだと強弁していた。

ミュンヘンにて

AIPPIフォーラムの後、ミュンヘンへ飛ぶ。南ドイツ、バイエルン公国の首都は、秋の収穫感謝祭に当るオクトーバ・フェストで沸き返っていた。滞在に余裕があったので、現地特許事務所での用務を済ませると、街の喧騒に背を向けて、郊外のダッハウを尋ねた。

ダッハウは昔フリードリッヒ王の離宮もあった清閑な郊外住宅地、しかしここには、1933年から45年

まで強制収容所が設立され、今は記念館として残されている。入口の「ARBEIT MACHT FREI」はアウシュウィッツの玄関に掲げられていたものを、戦後模造したものらしいが、戦時中この入口をくぐった政治犯、同性愛者、身障者、捕虜、そして大多数のユダヤ人は、労働によって自由になるどころか、ダンテの「神曲」地獄編の冒頭の言葉通り、「この門から入った者は、希望を捨てよ」に従ったのである。それは、ルネッサンス期ではない、わずか60年前の出来事だった。今は管理棟と監視塔、それに囚人棟を二棟だけを残し、更地になっている広大な収容所跡には、秋風が何事も無かったように、梢を揺らしていた(図2)。

その翌日、ドイツ鉄道DBの普通列車でザルツブルグへ向う。途中女学生の一団が乗り込んできて、急ににぎやかになった。大学の第二外国語でかじったドイツ語で話しかけると、彼女らもモーツアルトの生家を訪ねることは分かったが、ハイネのローレイヤやカール・ブッセの詩は知らないと言う。代わりに歌ってくれたのは、ホップ調のリズミカルな歌曲、2時間の旅はあっという間に過ぎて、汽車は既にオーストリアに入っていた。

ザルツブルグ！中世から近世にかけて岩塩鉱で栄えた大公の居城と川沿いの町は、モーツアルトが生まれ育った街として知られる。18世紀末、モーツアルト一家が住み、あちこちに演奏旅行に出かけた家が、全世界のモーツアルト・ファンに抛出した財



図2

団の手により修復され、博物館となっている。その前の小綺麗なミラベル庭園は、四季を通じ花が絶えない。まさにモーツアルトの音楽、天国の調べが緑の芝生の上を漂っていた。

アマデウスの旋律は、60年前のダッハウ強制収容所でも聴かれていた。管理棟のドイツ兵は、収容所内の地獄図から逃れて、心を慰める為にむさぼるように、樂聖の天使の歌声に聴き入っていたという。人間は、かくも残酷で、脆いものか。今でもヒトラーの呪いが渦巻くベルリンのホロコースト祈念公園、シェパードの咆哮と監視塔からの銃声が黒い森にこだまするダッハウ強制収容所、そしてモーツアルト一家の住いから天に向けて響くハフナー交響曲が、狭いヨーロッパの中に、天国と地獄が綾織のように同居する様子は、忘却を恒にする我々東洋人には息が詰まりそうだが、やはり大切にしなければならぬ歴史の教材だと、胸中深く想わされたことであった。

重い歩みの果てに

ミュンヘンを発って帰国する日の朝、思い立って電車で40分の郊外ウオーツゼーに、元ドイツ特許庁審査官チアゾン氏を訪ねる。彼は1981年の秋にドイツ特許庁から派遣され、当時土木審査長だった私の部屋に来て歓談した。それ以来20数年クリスマスカードの交換をしていたが、去年それが途絶えたので、彼は他界したのかといぶかっていた。

都心から地下鉄、郊外電車を乗り継ぎ、駅を降りたすぐ近くの通りに、彼の家はあった。呼び鈴を押すと、邸宅の中から寝巻き姿の老人が現れ、いぶかしそうに門の外を見ていたが、それが東洋からの客と分かると破顔一笑、邸内に招き入れてくれた。広い書斎兼居間には、彼が土木エンジニアであったことを示す19世紀の蒸気トラクタの模型や技術書が並んでおり、広い窓を通して庭に咲く赤い花と、畑の向こうの部落の教会の塔が望見される。地下室を含め200平米はある邸宅とそれを包む広い芝生の庭園は、田園調布の豪邸然としていたが、ドイツでは中流家庭の居宅だそうだ。このウオーツゼーの土地は



写真9

30年前購入し、10年かけて自ら設計し、建てたという。ご自慢の螺旋階段を撮らせてもらった(写真9)。当時郊外電車が直接地下鉄に入り、イザール河畔の特許庁には電車1本、40分で通勤したというから、当時日吉の官舎にいた私と同じような暮らし方だったのだろう。彼は退官後弁理士にもならず、人生の重い歩みの果てに、ここウオーツゼーで田舎暮らしを楽しんでいる。6年前奥さんに先立たれ、今は気候な独り暮らし、時々近所に住む4歳の男の孫が訪ねて、遊んでいくという。散らかしたままの玩具があった。私の5歳の孫太郎の訪問と同じだと、たちまち意気投合する。

私がミュンヘン訪問前に、ベルリンに行ったことを知らせると、彼の顔が一瞬曇った。すぐにもとの表情に戻ったチアゾン氏はしばしの沈黙の後、彼も生粋のベルリナーであること、第二次大戦末期、ドイツ国防軍に召集され、東部戦線に送られ、友人の多くが彼の面前で死んだが、彼自身は辛うじて生還し、その後は祖国再建にと土木工学を修め、特許庁

審査官になって以来ミュンヘン住まいだと、ぼそぼそと語ってくれた。1944年冬、レニングラード攻防戦で敗退したドイツ国防軍が戦火と寒気という劣悪な状況の中で、多くの兵士が斃れたことを、私も歴史書で読んだ。79歳の彼が60年前の地獄を語りたくない気持ちは、少年時代敗戦前後の混乱期を生きて来たものには良く分かる。彼も20世紀の天国と地獄の狭間で生きてきたのだ。それ以上聴くことをしないで、午後のフライトが迫ったからと、彼と別れ、ウォーツゼーを後にした。

別れ際握手しながら、再会を約したが、次に私がミュンヘンに行けるのは、何時になるだろうか。その時、元ベルリン子テアゾン氏が、今日と同じようにちょっと影のある笑顔で、私を迎えてくれるだろうか。9月末だというのに、ウォーツゼーには既に晩秋の気配が漂っていた（写真10）。

profile

徳永 博（とくながひろし）

1938年（昭和13年）佐賀県に生まれる

1962年（昭和37年）特許庁入庁

1966年（昭和41年）審査官（審査第二部建設）

1989年（平成元年）工業所有権研修所長

1991年（平成3年）退官、弁理士



写真10